

氏名	王 笑宇
学位の種類	博士（人文科学）
学位記番号	博 甲 第 9349 号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	正岡子規の俳句革新運動についての研究 —「写生」の受容を中心として—

主査	筑波大学	教授	博士(学術)	石塚 修
副査	筑波大学	教授	博士(宗教学)	津城 寛文
副査	筑波大学	准教授	博士(学術)	平石 典子

## 論文の要旨

本研究の目的は、日本近代を代表する文学者である正岡子規の文学活動のあり方について、従来の日本文学史における文学活動の大きなテーマのひとつである子規による「俳句革新運動」の実態について、彼の生涯にわたり創作した俳句作品を具体的に解釈することで解明しようとしたものである。

構成は以下のとおりである。

### 序章

#### 第一章 『陣中日記』における「写生」の受容

第一節 正岡子規の経歴／第二節 『陣中日記』と『おくのほそ道』の関わり／第三節 『陣中日記』と『野ざらし紀行』の関わり

#### 第二章 動物詠における「写生」の受容

第一節 新季題の発見／第二節 「きりん」とは何か／第三節 「動物園」や「サーカス」の詠み方

#### 第三章 ほととぎす詠における「写生」の受容

第一節 正岡子規と「ほととぎす」の関わり／第二節 血を吐く「ほととぎす」／第三節 剥製の「ほととぎす」

### 結章

各章の委細は以下のとおりである。

序章では、これまでの正岡子規研究では常識化されてしまっている「写生」理論について、先行研究をふまえて検証しながら、その常識がじつは彼の具体的な作品に回帰できるものではないというあらたな問題提起をおこなった。

第一章では、日清戦争の従軍記者として新聞「日本」を書いた『陣中日記』における「写生」のあり方について論じた。その理由は、本来ならばもっともリアリティのある「写生」の真価が見られるはずである紀行文に着目し、その実態をそれ以前に書いた「水戸紀行」などの紀行文とも比較して明確にして、これまでの正岡子規研究と対照することで、子規の「写生」理論が彼の文学全般に及んでいるわけではないことについて解明した。とくに、子規の中国本土での見聞をどのような姿勢で描写・表現したかを、中村不折らの絵画資料とも比較し克明に追究している。

第二章では、動物詠における「写生」の受容について、文明開化による新しい季題を子規がどのように取り入れていったかを解明し、とくに「きりん」の俳句への詠み方や「動物園」・「サーカス」の詠み方を通して克明に追究した。そのことで「写生」による革新よりも季題の新鮮さが、むしろ子規の作品の新鮮さであり、そのことが、旧派といわれる江戸時代の俳諧を継承する人々に対しての対抗につながっていると考察している。

第三章では、子規がまさに自らの俳号にまでした「子規」、すなわち「ホトトギス」を、実際にどのように俳句において詠じたかについて具体的な作品をとりあげ、子規を名乗る以前と、それ以降で「ホトトギス」の作品には差はないのか、またそこに「写生」の観点はいかにどの程度まで存在しているのかについての調査をおこなって、あらためて「写生」による俳句革新運動が子規自身にどの程度まで浸透していたのかについて究明した。

結章では、第一章から第三章を通して正岡子規作品における「写生」の実態を検証した結果について、あらためてまとめ、日本文学史研究での常識とされてきた正岡子規の「写生」論にもとづく俳句革新運動の実態が、先行研究で指摘されているほどには固定化していなかったことが作品を具体的に検討することで確認できたことを述べた。

## 審査の要旨

### 1 批評

本研究のすぐれている点は、まず、日本文学史研究で常識化されていた正岡子規の「写生」理論と俳句革新運動について、あらためて子規の作品に即して検討しなおした点である。その結果として、子規の俳句には、従来の日本文学史研究で主張されているほど「写生」理論は反映されていないのではないかという結論にいたった。

なかでも、これまでほとんど研究されていなかった点である明治28年の、新聞『日本』の従軍記者として中国の遼東半島での実際の見聞を描いた『従軍日記』に注目し、どのようにリアルな見聞を、自分の文芸創作としていったかという経緯について、松尾芭蕉の『おくのほそ道』と比較したり、中村不折・浅井忠の絵画資料なども使いながら図像学的に解明したりしたことは、本研究の特筆できる点である。今日まで、そうした作品によりそった具体的な検証が正岡子規研究でなぜなされてこなかったのかという疑問は当然であろうが、子規の約20000句におよぶ膨大な俳句の作品群にたいし、具体的にその検討を完遂することが容易ではなく、そのことが研究の進展への大きな障害要因になっていたと考えられる。本論文が、そのように日本人であっても容易になし得なかった作業の成果としてあることを、まずもって評価の前提とする必要がある。もとより、日本人であってもなかなか困難である韻文の理解と解釈において、外国人であるがゆえに、作品との文化的背

景をまったく共有していない段階から学修して解釈に挑んだため、その解釈の細部には、まだ不十分かつ未成熟な点があることは否めない。しかしながら、日本の近代化の本質を研究するという人文科学全体の問題を、その代表とされる文学者の一分野において全作品を通覧し、ある結論を導くにまで到達したことは、まさに国際的な主体性に支えられた研究として高く評価されるべきであると考ええる。

江戸時代の俳諧から正岡子規が提唱した俳句という文芸への転換が、「写生」理論によって開眼したとする従来の日本文学史研究の通説にたいし、子規の俳句作品の「取り合せ」、すなわち「配合」を調査し、そこに見られる明治時代とともに日本に輸入されてきた文物、いわゆる文明開化の影響が、本当に新しい文芸としての俳句に反映しているかを検討すれば、そこには子規の独自の「写生」の視座が見られるのではないかという仮説にたち、とくに動物詠を中心に作品を具体的に探究し、その結果、江戸時代の俳諧の文化的コードとも共有する部分を見出し、一方で、近代俳句における動物の詠み方の特色を見出して、キリン・ホトトギスといった素材、さらには動物園・檻という形象の発見にいたったことは評価される。

また、本研究の今後の見通しとしては、日本文化の国際的発信力にも大いに貢献する可能性を秘めた研究として期待できるものと推察する。俳句は、「**HAIKU**」として国際的にも日本国内で想定している以上に、強い関心と高い評価を外国では受けており、その創始者といえる正岡子規の作品について、とくに克明な解釈を中心にした外国人による研究が進展することは、今後、外国に日本文化全般を紹介していく良好な契機をもたらすこととも連携していると考えられる。また、著者が近代以前の俳諧に関して今回の研究をとおして習熟したことからも、本研究が日本文化・日本文学の発信に寄与するところも大きいと考える。

## 2 最終試験

令和2年2月4日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

## 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（人文科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。